電経新聞
2013年2月18日　掲載

伝えるコミュニティの中で変わる

中村 雅子

横浜市都筑区では子どもたちが記者講座で学び、ジュニア記者として地域の活動などを取材して、自分たちの目線で記事を書き、ウェブサイトで情報発信をしている。子どもたちは、記者活動の次のステップとして主体的に地域活動、街づくり活動に参画するようになっている。

研究室が地域のNPOと一緒に運営している地域メディア活動がある。名称は「つづきジュニア編集局」。公募で手を上げた地元の小学校4年生から高校3年生の子どもたちが、記者講座で学び、編集会議で企画を考え、ジュニア記者として地域の施設、企業、人、イベントや市民活動などを取材して、子どもたちの目線から記事にし、ウェブサイトで情報発信をしている。

元々は地元行政（横浜市都筑区役所）とNPOの協働事業で単年度で終了予定だった。しかし活動を知って参加を希望する子どもが多く、ジュニア記者自身からも継続の希望が強かったため、現在は運営主体をNPOと本研究室に移行し、まもなく5年目に入る。1年ごとに改めてメンバーを募集しているのだが、2年以上にわたって参加する子どもも多く、初年度からの参加者は、もう4年、この活動に関わってくれていることになる。メンバーは徐々に人数が増えてきて現在53名。毎年の振り返りの中で多くの子どもたちが、この活動以外でも地域関心が増したり、コミュニケーション力に自信を持ったりするようになったと答える。異なる年齢層の子どもたちが一種の対等性を持ってコミュニケーションをするという意味でも、同年齢のクラス単位の活動を基本とする学校教育とは異なった学びの場を提供しているのではないか。記者同士、あるいはNPOや大学生スタッフとの交流は、定期的な編集会議のほか、常時、メーリングリストや内部向けサイトでも行なっている。年間を通じて子どもたちと接し、その成長を見守ることは、学生たちにも貴重な経験になっている。

「つづきジュニア編集局」が年1回行なっている公開Ｕｓｔｒｅａｍ放送「つづきジュニア放送局」の様子

活動支援の中で見えてくるのは地域の情報発信とは、まず発信者自身が地域について理解を深めることだという点である。参加した子どもたちはみな、活動を通じて地域への関心や興味が増したと答えている。また記者活動の次のステップとして子ども自身が主体として地域活動、街づくり活動に参画する事業にも関わるようになっている。

今日、多くの地域に自治体による市民レポータや、市民情報発信グループがある。実際のところ、これらの参加者も、住民に対する情報の到達率・視聴率も、数字で見れば微々たるものかもしれない。しかしそこにはジュニア記者たち同様、その活動に限定されない地域への関心や関与、愛着、社会とのかかわり合いを増していくような変化が生まれる契機がある。その要件は発信主体となった人びとが一方向的な情報提供者、投稿者となるだけでなく、そこに地域や互いと関わるコミュニティが生まれることではないか。単に人口の中の比率を問題にするのではなく、絶対数の面で、そのような人びとが増えていくことの価値はもっと評価されていいのではないかと考えている。

なかむら・まさこ　東京都市大学環境情報学部教授。主要な関心・テーマは地域・コミュニティやユーザからみたメディア・情報システム。京都大学博士（人間・環境学）。

●この記事・写真等は電経新聞社の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

東京都市大学グループ
学校法人 五島育英会